

江戸時代のトイレ文化

Toilet Culture in the Edo period

山路 茂則*
YAMAJI Shigenori

要約 江戸時代、長屋の共同トイレは江戸では惣後架、京坂では惣雪隠と称した。

惣後架の戸は半戸であり、惣雪隠では現代と同じく長かった。

半戸の理由は、防犯・採光・回転率向上・臭気対策・資材節約等が考えられる。

尾張ではどうやら半戸であったようだが、継続研究が必要である。

大坂の谷町には、大便所の左右に戸がある「両頭の雪隠」があった。

尿尿は肥料として貴重品であり、とりわけ京坂では尿の収集にも力を入れていた。

キーワード：トイレット (toilet)、江戸時代 (Edo period)、戸 (door)、肥料 (fertilizer)

1. はじめに

本稿では江戸時代の「トイレ」を通して江戸と上方の文化の違い、すなわち現代にも通じる人々のものの考え方、見方の違いを考察しようとするものである。

なお、文中「トイレ」という語を使用しているが、これは現代語である。廁、雪隠等と使い分けるのが適切と考えないでもないが、煩雑になるのを避けるため、原則として「トイレ」を用いることにする。

2. トイレの構造

(1) 戸の長さ

喜田川守貞は文化7年(1810)に大坂で生まれ、天保11年(1840)に江戸へ移っている。その彼が見聞した事項をまとめたのが『近世風俗志』である。本書は江戸時代の風俗について図版も多く、一種の百科事典ともいえる。そこで「廁」の項を引くと、次のように出ている。

長屋と号して一字数戸の小民の借屋には、毎戸に廁を造らず、一、二戸を造りて数戸の兼用とするなり。これを京坂にては、惣雪隠と云ふ。江戸にては、惣がうかと云ふ。

京坂、惣雪いんは(中略)戸も全くに長し。江戸の惣がうかは(中略)戸も半戸なり。(『近世風俗志』)¹⁾

これまでの研究書、解説書においては、上記の記述を引用して、長屋の共同トイレの戸は、江戸では半戸、すなわち、蹲って使用している人の頭が見え隠れする程度の長さであり、京坂では現代と同じように全戸であった、としてその説明を了えている。

それでは何故、江戸と京坂とでは戸の長さに差があったのであろうか。その点に触れた考察は寡聞にして知らない。そこで筆者なりに江戸の半戸の理由を次のようにまとめてみた。

㊦防犯のため

トイレは屋外に在って、通行人を含めて誰でも自由に出入り可能である。しかも男女共用である。不埒者が内部に潜んでいて、用を足しに来た人を襲ったり、隣室を密かに覗き見ることも無きにしも非ずである。そこで半戸にしておけば、内部に人がいるかどうかは容易にわかる。現代でもアメリカなどでは足元の部分が丸見えになるように造られている戸を見かけるが、同様の発想である。

* 大阪観光大学観光学研究所

④採光のため

夜間に利用する際、蠟燭・提灯の使用もあるが、これは火災の原因になる虞がある。火災は大敵である。半戸であれば月の光がさし込み、薄明かりを得られる。

⑤回転率を高めるため

長屋の住人数に比してトイレの数は少ないし、その利用は朝など一時に集中しがちである。それゆえトイレ内で長居をしないよう、用が終ればすぐに出るように仕向ける目的で半戸とした。

⑥臭気緩和のため

肥壺から発生する臭気を大気中に放出しやすくするために半戸とした。たしかに通風は良くなるだろうが、冬期は一段と冷えるであろう。

⑦資材節約のため

用を足す際には必ずしゃがむのだから、下半身が隠れておれば十分である。半戸にすることにより、戸半分の木材は節約できる。

以上、どれを採ってももっともな理由であり、あるいはこれらが複合して半戸になったとも考えられるが、これだけでは京坂の全戸との相違を説明しきれていない。京坂においても変質者はいるだろうし、臭気も気になるであろう。また、夜、暗くて不便なのは江戸と同じだからである。

それでは江戸の共同トイレが京坂に比して開放的に造られていたのは、どのような理由があったのか。

我々はトイレの壁が落書板替わりになるのを知っている。そこには相合傘の男女の名前や卑猥な言葉が書いてあったりするが、そんなものは大した問題ではない。しかしながら、そこに政治批判的なもの、思想信条を訴えるものが書かれたらどうだろう。トイレの壁が広報板の役割を担い、人々の間に伝播していく可能性は充分にある。幕府のお膝元である江戸市中において、政治的な不満やそれに類する噂が広まっていくのは施政上よろしくない。それを防止するために、江戸版インターネットをさせないように、トイレの戸を半分にして、外部から見えるようにしたのではないだろうか。

このような解釈に参考となる事例がある。

高橋正明はその著書『トイレ・環境・まちづくり—中国と日本の場合—』の中で、中国の公共トイレが戸なく、仕切りもない「ニーハオトイレ」である理由について、西条正『中国人として育った私—解放後のハルビンで』（中央公論社 1978年）を引用している。

わが家の近くに出来た公衆便所の場合は少し違う。最初からドアなし、囲いなしのものではなかったのに、なぜドアや囲いを取り壊したのだろうか。これは、実は当局が「落書き文化」を絶滅しようとしたからである。（『トイレ・環境・まちづくり—中国と日本の場合—』）²⁾

ところで、江戸・京坂の様子は『近世風俗志』で明らかになったが、それでは尾張ではどのようなものであったのだろうか。

現代の名古屋は距離的には東京よりも大阪に近いけれども、その文化は東京の影響を強く受けているようである。卑近な例だが、エスカレーターの利用方法である。大阪では右側に寄り、急ぐ人のために左側を空けておく。一方、東京では左に寄り、右側を空けておく。それでは名古屋ではどうかといえば、左側に寄る東京式となっている。もっとも近頃は、各都市とも歩かないで2列に並んで利用するよう、設置者はPRしているようである。

閑話休題。

ここに尾張藩士・朝日重章による『鸚鵡籠中記』なる日記があり、その宝永4年（1707）6月7日に、若侍（志水茂右衛門の子・19歳）がトイレで老婆を妖怪と誤解して斬りつける事件があった、と記している。

城下、本重町（現名古屋市中区錦1、2丁目）辺は化物が出るという噂がある所であった。そのような気味の悪い場所で若侍がトイレに入って用便をしていると……。

この子暮に雪隠にあり。頃日、所々痲病甚だ流行し戸々皆悩む。表借屋の婆廁へ行かんとしけるが指し合う故、大屋の廁へ行きしに、かの子内にある故婆腹痛に堪えかね、ひたと廁の内を覗き、その意早く廁へ代わり入らんとす。その躰蓬頭憔悴、呻吟大息、あたかも化物のごとし。かの子大いに駭き、何者ぞと詞をかけけれども、婆耳遠くして聞くを得ざる故に答えもなし。ここにおいて堪えかねて切り付けしかば、大いに駭き叫喚する間、人々集まりけると云々。(『鸚鵡籠中記』)³⁾

この珍事が起きたトイレの戸は、半戸であったのは明白である。なぜならば、半戸であったからこそ婆は内部に若侍が入っているのを知り、早く交替してくれと急かすし、蹲って用を足していた若侍は、髪を振り乱した老婆を妖怪と見間違えて斬りつけたからである。

どうやら尾張の戸は半戸であったようだが、この一例だけをもって断定するのは困難である。今後とも尾張のトイレに関する記述等を調査し、半戸であったか否かを明らかにしたい。

(2) 両頭の雪隠

『東海道中膝栗毛』は、弥次郎兵衛・北八の2人がしくじりや滑稽を重ねながら、江戸から大坂へ向かう物語である。同書は享和2年(1802)から文化6年(1809)にかけて刊行され、発端編は文化11年(1814)に書き加えられた。本書が好評をもって迎えられた理由は、主人公が巻き起こす滑稽話に加えて、道中の名物、名所旧跡、そして土地土地の珍しい風俗を織り込みながら筆が進行していく、いわば観光ガイドブック的役割を果たしているところにもあるだろう。

大坂の谷町に着いた2人(八編・上)は居酒屋の暖簾をくぐり、そのトイレでまたまたのしくじりを展開する。原文をそのまま引用するとかなりの量になるので、現代語訳を織り交ぜながら整理して紹介する。

北八は「ときに尾籠ながら用たしにいつて来よふ。」と居酒屋の縁側からトイレに入る。用が済んで戸を開けたところ、「ふしぎなるかな、さかやの内にてはなし。そもそもこのせつちんは、二けんまへのせつちんにて、此さかやとうらにすむ人の家と、両ほうにてつかふせつちんなれば、あなたにもこなたにも両くちあるゆへ、きた八うろたへて、はいりしほうの戸をあけず、むかふの戸をあけて出たるゆへ、よそのうちなり。」

隣家の隠居に元に帰るよういわれ、トイレの戸を開けようとする、弥次郎兵衛が内側から掛金を掛けている。北八が、早くそこを開けてくれ、といっても、「いけむことア大毒だといふこつたから、ひとりでに出てくる時節を待てるのだから、すこしひまがある。」などといって、なかなか出ようとしなない。そこで北八が無理に戸を強く押すと、掛金が外れてトイレの中へ転げ込む。結果、居酒屋側の戸も壊して、弥次郎兵衛もろとも居酒屋の方へドサッと倒れて大騒動。(『東海道中膝栗毛』)⁴⁾

この件を読んだ江戸の人々は、北八・弥次郎兵衛のしくじりを笑うとともに、大坂の珍しい構造のトイレの存在を知るのである。文中のトイレは「両頭の雪隠」と称されるもので、トイレの両サイドに戸が設けてある。トイレはしょっちゅう使用するものではない。それゆえ、2軒が1つのトイレを共用すればスペースの節約になると考えた大坂人の合理的発想から生まれたもので、江戸では見かけることはない。それだからこそ、滑稽の材料に採り上げられたわけである。

3. 屎尿の利用

惣後架、惣雪隠に溜まった屎尿の利用について、再度『近世風俗志』を引用しつつ筆を進める。

(家主は)地主の地面を支配し、(中略)家主株は陽に金をもつてこれを譲る。(中略)大略百両の株の年給二十両・余得十両・糞代十両、おほむねおよそ三、四十両を得る。(『近世風俗志』)⁵⁾

家主は俗に大屋ともいい、地代・家賃を店子から集めて地主に収め、町内の治安を護るのを職とする。この家主の株は売買可能であって、いま100両の値がついている株を買ったとすると、年に30～40両の収入が得られ、その内訳は、地主からの給料が20両、諸手数料10両、肥代10両ほどというから、肥代も馬鹿にならない額である。

江戸は尿は専ら溝渥にこれを棄て、(中略)尿代は家主の有とし、得意の農夫にこれを売る。稀に尿を蓄ふ者あり。皆代家主に収む。京師は尿は借家人の有として野菜と代ふる。(『近世風俗志』)⁶⁾

江戸では共同トイレに溜まった尿は家主のものとなり、農家に肥料として売却するが、尿は棄ててしまう。しかし、京においては尿も棄てることなく野菜と交換し、それは借家人のものとなっていた。

『東海道中膝栗毛』で弥次郎兵衛が、海へ多量(3斗8升)の小便をしたという上方者に対して、

京では小便と菜と、とつけへこにするといふことだから、小便も大切なもんだに、おめへ海の中へおいしいことをした。その三斗八升でとりけへたら、菜が馬に五駄や六駄はくるだろふに。(『東海道中膝栗毛』)⁷⁾

と、からかっている。

江戸は幕府に仕える大名やその家来・家族、地方からの出稼ぎ人、商用で滞在する人などで繁栄した。そこから日々排出される尿尿は膨大な量で、近郊の農家の肥料として十分な量が確保されていた。

一方、京坂では人口が江戸の5分の1程度であり、汲取り先の争奪や代金をめぐっての紛争が絶えなかった。また、尿は尿のように時間をかけて発酵させる必要がなく、即効性がある点も上方人に評価されたようである。

4. まとめ

いまや全国的にみて、半戸であるトイレを発見するのは難しい。そしてまた、化学肥料が手軽に手に入るようになり、尿尿を肥料として使用することも殆どなくなった。それではトイレ分野での東西の相違は見い出せないのかというと、そうとばかりはいえない。例えば、トイレトーパーだが、関東のスーパーマーケットではダブルがよく売れて、関西ではシングルがよく売れるという。大王製紙によると、関東圏ではシングル：ダブルの比率は4：6で、関西圏では6：4とのことである。我々は、ダブルは肌触りが良いけれども、長く引き出しがちなために減りが速いのを経験的に知っている。関西圏では個人の好みにもよるが「使いごち」より「経済性」を重視する傾向が強いようである。両頭の雪隠を発想し、肥料としての尿尿を大切にしたい関西人気がいままなお生きているのである。

【参考文献】

- 1) 喜田川守貞著・宇佐美英機校訂(1996)：『近世風俗志(一)』 岩波文庫 P.103
- 2) 高橋正明(2005)：『トイレ・環境・まちづくり—中国と日本の場合—』 晃洋書房 P.91
- 3) 朝日重章著・塚本学編注(1995)：『摘録鸚鵡籠中記(下)』 岩波文庫 P.81
- 4) 十返舎一九・麻生磯次校注(2002)：『東海道中膝栗毛(下)』 岩波文庫 PP.303-306
- 5) 喜田川守貞著・宇佐美英機校訂(1996)：『近世風俗志(一)』 岩波文庫 P.137
- 6) 喜田川守貞著・宇佐美英機校訂(1996)：『近世風俗志(一)』 岩波文庫 P.138
- 7) 十返舎一九・麻生磯次校注(2002)：『東海道中膝栗毛(下)』 岩波文庫 P.76

本稿は、第1回観光学研究所研究発表大会(2018年7月14日開催)において発表した内容を活字化したものである。